

森本家文書目録解題

森本家文書には、安永期から寛政期までは文左衛門が、享和期から文化 10 (1813) 年まで覚兵衛の名が出てくる。文左衛門は天明期後半から大豆新田村の庄屋を勤め、その後文化 10 年まで覚兵衛がそれを継承した。覚兵衛は文化 5 (1808) 年ころ高田藩の大豆組大肝煎役に任ぜられた。文化 8 (1811) 年の大豆組明細帳 (16-150-1) によると、森本家は大肝煎として、藤新田村・岩木村・宇津尾村・下正善寺村・中正善寺村・上正善寺村・牛池新田村・宮野尾村・虫生岩戸村・中屋敷村・大豆新田村・四ツ屋分・林道寺分・居田分・安国寺村・至徳寺村・砂山村・国分寺新田・塩屋新田村の 19 か村を管轄していた。その後、紋左衛門が大肝煎役を勤め、嘉永 5・6 (1852・3) 年には能生町組大肝煎を兼帯した。嘉永 6 年 10 月、文治郎 (文次郎) が大肝煎仮役となり、まもなく大肝煎役に就いた。明治 2 (1869) 年から文一郎が大肝煎となり、同 4 年まで続けた。また、森本家は幕末から明治初頭にかけて中屋敷大豆宿の本陣も務めた。

明治 4 年まで大豆組大肝煎役を務めた文一郎は、その後柏崎県第十大区二十二小区総代となり地域社会のまとめ役を続けたが、明治 11 (1878) 年 7 月 11 日死亡した。

その跡を継いだのが義質である。義質は、明治 19 (1886) 年北海道へ渡り、札幌と小樽間に 1000 町歩の土地を求めて開拓事業を進めた。しかし、故あって明治 29 (1896) 年に北海道開拓から撤退、帰郷した。

明治 36 (1903) 年の森本家の土地所有高は約 75 町歩であった。森本家が、近世・近代を通じて土地集積を行い、頸城地方で有力な地主になっていったことがうかがえる。また同家には、和漢の書籍や仏典はもちろん、謡曲・茶道など趣味に関する大量の蔵書がある。これらは、地主層としての学問や教養の深さを示すものである。義質の跡を和二郎が継いだ。

「森本家文書」は、松平忠輝老臣連署の 3 月 9 日・26 日付 (1615 年前後と推定される) 藤巻村と藤巻新田村百姓中宛の、いずれも新田開発を奨励する書付 2 点をもっとも早いものとし、この 2 点の外は 18 世紀以降から 20 世紀前半までのおよそ 5,500 点の森本家伝来の史料群である。「森本家文書」は大別して次の 2 群に分けられる。

一つは、森本家が近世期、大豆新田村庄屋を務め、また 19 世紀初めからは高田藩大豆組大肝煎、また北陸道大豆・中屋敷宿の間屋・本陣の役を担ったことにもなって作成された公文書である。もう一つは、森本家の私的文書である。さらにその私的文書は、森本家の由緒や出自、地主経営やその他経済活動、家計、趣味・教養、東本願寺門徒としての本山や地域の宗門寺院への参詣や護持奉加・祖先の法要など信仰に関係するものに分けられる。森本家文書は、平成 7 年、上越市立高田図書館へ寄贈された。

(松平忠輝重臣発給文書)
藤巻新田百姓中←松平大隅
守重勝・山田隼人正勝重・松
平筑後守信直
(3 月 26 日)
藤巻新田開発の優遇措置

